

第 16 回 IEA-IEF-OPEC Symposium on Energy Outlooks に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

2 月 4 日、サウジアラビア・リヤドにおいて、第 16 回 IEA-IEF-OPEC Symposium on Energy Outlooks が開催された。このシンポジウムは 2011 年の第 1 回以来、毎年リヤドで産消対話の一環として開催されてきた。第 13 回会合までは、本会議の主催団体の一つである International Energy Forum (IEF) の Headquarter (在リヤド) において開催されてきたが、第 14 回会合以降は、会議の規模の大幅拡大に合わせて、同じくリヤドに本拠を置くシンクタンク、King Abudallah Petroleum Studies and Research Center (KAPSARC) に会場を移して開催されるようになっていく。今回の会議には表題の世界の 3 大エネルギー国際機関の代表を始め、主要国政府関係者、エネルギー産業関係者、専門家が集まり、短・中・長期の世界のエネルギー見通しについて、チャタムハウスルールの下で活発な議論が行われた。

このシンポジウムの目的は、国際エネルギー市場の安定のため、消費国を代表する IEA と産油国を代表する OPEC が、産消対話のための機関 IEF の仲立ちで、率直に意見交換と対話を実施することである。シンポジウムの総合テーマは、「Megatrends, Resilience and Change」であり、その下、第 1 セッション「IEA and OPEC Energy Outlook Comparison」、第 2 セッション「Medium-Term Outlooks: Navigating Headwinds with Resilience」、第 3 セッション「Long Term Perspectives on Aligning Energy Security with Transitions」などのセッションで活発なパネル討論が行われた。筆者は第 3 セッションにパネリストとして登壇する機会を得た。

筆者はこれまで、このシンポジウムへの参加を重ね、昨年の第 15 回シンポジウムについては、小論「国際エネルギー情勢を見る目」729 号で議論のポイントをまとめている。それから 1 年間が経過し、国際エネルギー市場には、その間に多様で重要な変化が引き続き生じ続けてきた。そうした変化が今回のシンポジウムの議論に色濃く反映しており、極めて興味深い影響が現れていることを実感することになった。以下では、今回のシンポジウムの議論を通じて筆者が感じた大きな変化や重要なポイントをまとめることとしたい。

第 1 の、そして最大の変化と感じられたのは、エネルギーの安定的かつ Affordable な価格での供給確保の重要性に対する圧倒的な関心の高まりであった。2020 年代に入ってから、気候変動対策強化に向けたエネルギー転換をどう進めるか、が世界的に極めて重大な関心事となり、当時このシンポジウムでも議論はそこに焦点が当てられてきた。しかし、ウクライナ危機の発生以降の国際エネルギー情勢の不安定化、地政学リスクの高まり、世界の分断の深刻化、エネルギー価格上昇に対する社会の脆弱性の高まり、などが世界的に強く認識されるようになり、気候変動対策強化イコール脱炭素化と、エネルギー安全保障強化の両立が重視される方向に変化が進んできたのがここ 2～3 年までの流れであった。

しかし、脱炭素化に向けたエネルギー転換の難しさ・複雑さがますます明らかになってきた一方で、暮らしや経済に必要不可欠であり、経済成長や人口増加と共に増大せざるを得ないエネルギーの需要を、安定的に Affordable な価格で供給することが如何に重要であるか、が全ての国で最重視されるようになる「現実」が明確化している。そのため、これはあくまで筆者個人の主観でしかないが、今回のシンポジウムの議論では、脱炭素化とエネルギー安全保障の両立は重要であるという意識そのものは存在しているものの、圧倒的

にエネルギーの量・価格面双方での安定供給問題に焦点が当たった議論になったという感じを受けることになった。本会議の中でしばしば用いられることになった、(脱炭素化からエネルギー安定供給へと)「Narrative が変わった」というフレーズはそれを象徴していたように筆者は受け取ったのである。

第2に、上記の「Narrative の変化」をもたらした重要な要因として2つのポイントがあったと筆者が感じたことを指摘したい。最初のポイントは、これまでの Narrative は、あくまで先進国の Narrative であり、世界全体とりわけ今や世界のエネルギー需要の重心である途上国・新興国の経済・人口の実態を考えると、今後も世界のエネルギー需要は増大する傾向にあることを理解すべき、という議論が本シンポジウムでの基調となった。しかも特に途上国・新興国においては、安定的で Affordable な価格でのエネルギー利用が重要であることを考えると、化石燃料の需要が世界的に底堅く持続する可能性が高いという意識も今回の議論の底流になった。これは、我々が対応しなければならないのは「エネルギー転換 (Energy Transition)」ではなく、「エネルギー追加 (Energy Addition)」に関わる問題である、との意識といっても良い。

もう一つのポイントが生成 AI とデータセンターによる電力需要増大がもたらしている Perception の変化である。シンポジウムの議論においては、AI やデータセンターの影響に関する様々な不確実性やデータセンターの省エネ、あるいは AI 活用による省エネの可能性などについても様々な議論があったが、やはり、問題関心の中心は、AI やデータセンターの拡大による電力需要増大にどう対応するのか、ということであった。筆者にとって印象に残った意見の一つとして、AI やデータセンターの拡大を牽引している「Big Tech」などの動きのスピードとスケールが、エネルギー供給サイドでの取り組みのそれを遥かに凌駕してしまっており、巨大なミスマッチが起こる可能性がある、という指摘であった。だからこそ、安定的で Affordable なエネルギー供給をどう確保・実現するか、が喫緊の問題として意識されるようになってきているのである。例えば、米国では足下で寒波の影響に加えて上記要因などの影響もあって、電力・ガス価格上昇の傾向が見られるようになっている。これが米国の国内エネルギー政策にどのような影響を及ぼすかも注視すべきかもしれない。

第3に、今回のシンポジウムの議論では、エネルギー及び経済安全保障問題の関連で、レアアースなどの重要鉱物 (Critical Minerals) の安定供給確保の重要性が改めて強く意識されることになっていたことを実感した。世界の分断が進み、米中対立の厳しさが増す中で、レアアースなどの重要鉱物の安定供給問題は、広い意味での新たなエネルギー・経済安全保障問題として捉えられるようになってきている。今後のエネルギー需給構造の変化の中で、重要鉱物の需要が増大し、将来的な需給逼迫と価格上昇が発生する可能性を考えると、その安定供給確保は極めて重大な問題となる。それは、重要鉱物の供給における中国など特定国が占める極めて高い市場シェアの存在と、その下での「Market Power 行使」の可能性が意識されるためである。国際エネルギー市場の歴史からも、戦略物資における「Market Power 行使」の問題から教訓を学び、対応策を検討し、国際的な協力を推進すべき、という意識に基づいた議論も展開されることとなった。

今回のシンポジウムには、数年ぶりに IEA の Fatih Birol 事務局長が参加したことも多くの参加者の耳目を集めることになった。残念ながら OPEC の Haitham Al Gais 事務局長が急遽欠席となったため、3 団体のヘッド「揃い踏み」とはならなかったが、Birol 事務局長の参加は極めて有意義であったと筆者は感じた。IEA の World Energy Outlook は今年の 2025 年版から、長期的にエネルギー需要が増加する「現行政策シナリオ」を久しぶりに復活させたが、これも最近の国際エネルギー情勢における様々な変化を反映したものと言えるだろう。現実に関わりつつある様々な重要な変化を踏まえつつ、本シンポジウムのような重要な産消対話が今後も建設的に促進されていくことを大いに期待したい。

以上